



特別記事 CP プラス 2016

石田 武久

はじめに

アジア最大のカメラと写真のプレミアムショー「CP+(CAMERA & PHOTO IMAGING SHOW Plus)」が2月25日から28日まで横浜パシフィコで盛況に開催された。

1960年創設の「第1回日本カメラショー」が元祖で、その後、様々な経緯を辿りつつ、2005年から2009年までカメラや写真関連の4団体が主催の「フォトイメージングエキスポ (PIE)」に継承された。

2010年には4団体持ち回りの開催から一般社団法人カメラ映像機器工業会 (CIPA) の単独開催となり、「カメラと写真映像分野における技術・文化・産業のあらゆる進化を目指す」をコンセプトに、名称も「CP+」と改まり今日に至っている。

半世紀を越える長い歴史と伝統を持つ世界をリードする総合的カメラ映像ショーで、カメラ・映像機器・写真の成長過程と最先端技術に接しられるということで、7回目を迎えた今回は国内外から132社・団体の出展社数と67792人を数える来場者を迎え大盛況だった。今年はメイン会場の大ホールだけでなく、アネックスホールでは

「中古カメラフェア」と「フォトアクセサリアウトレット」も開かれ、さらに今回初めての試みとして、大榎橋ホールにも「写真作品を創り、発信し共有するギャラリー&コミュニティスペース『フォトハーバー』」も開設され、さらに「三溪園」や「象の鼻」など市内各会場とも連携したイベントも行われ、専門家だけでなく一般のカメラ・写真ファンも大勢訪れ、盛況だった。

映像メディアの老舗である写真・カメラの世界にも映像・画像メディアの変革、デジタル化の波が確実に押し寄せている。静止画像と動画映像の境界、棲み分けもフュージョンしつつある。今年も昨年に続き「プロ向け動画エリア」が設けられ、最新の4K関連カメラやシステムが展示されていた。また、写真作品は従来の紙によるだけでなく、急速な進展をしている超高精細度の4Kモニターを使った表示が各社ブースなどで数多く見られた。

カメラ・レンズ

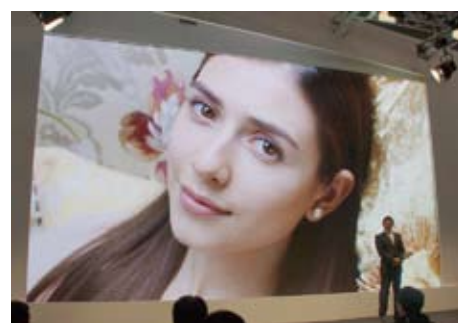
◎カメラ、写真分野の大御所**キャノン**は、場内随一の広大なブースで「新次元の表現力で、かつてない感動を」をテーマに掲げ、大画面の4K LEDディスプレイを使いプレ

ゼンテーションをし、プロの高度な要求に応える技術、高い品質を注ぎ込んだ幅広い製品のラインアップを展示していた。

今回、新製品の一眼レフ/ミラーレスカメラ2機種が出展され注目を集めていた。ひとつは、従来モデルのEOS-1D X (有効約1810万画素)を上回る有効2020万画素35mmフルサイズCMOSを搭載した「EOS-1D X Mark II」で、高いSN比と広いダイナミックレンジで、高感度画質や暗部のレタッチ耐性をさらに向上させた。さらに読み出し速度を高速化し最高約16コマ/秒の高速連続撮影を実現した。同機はCP+2016ワールドプレミアアワード (レンズ交換式カメラ部門)を受賞した。もう1機種は近々販売開始予定の「EOS-80D」で、約2420万画素CMOSセンサーを搭載し、常用ISO感度100~16000の高画質の上、フルHD60pの動画撮影機能を実現した。また別コーナーで展示されていた新映像エンジンDIGIC 7を初搭載した小型・高性能コンパクトデジタ



写1. 広範な業界を物語るテープカット



写2. 4K LED大型ディスプレイでプレゼン



写3. デジタル一眼レフカメラEOS 80D



写4. X-Pro2、X70 シリーズをメインに展示(富士フィルム)

ルカメラ“Power Shot G7 X Mark II”(今月末発売予定)は、レンズ一体型カメラ部門でプレミアアワードを受賞した。

これらデジタルカメラとは別のコーナーでは、自社製 CMOS センサー(画素数 8192 × 4320)を搭載した開発中の“CINEMA EOS SYSTEM 8K”カメラと EF シネマレンズ“CN-E14.5-60mm”を使って撮影した映像を4台の4K プロジェクターを使い上映し、超臨場感ある映像体験をさせていた。

◎富士フィルムは、高画質で豊富なラインナップの X シリーズをメインにブースを構えていた。出展の目玉は、従来モデルより大幅に性能を向上させた最新機種“X-Pro2”と“X70”である。X-Pro2 は新開発の 2430 万画素 CMOS センサーと超高速の新型画像処理エンジン X-Processor Pro を搭載し、優れた色再現、階調再現、低ノイズと高速 AF を実現した X シリーズ最高の画質と機動性を実現したフラッグシップのレンズ交換式デジタルカメラである。光学ファインダーと電子ビューファインダーの切り替えが可能で、X シリーズでは初めて SD カードを2枚挿入できるデュアルカードスロットを採用し撮影画像の保存の信頼性を高めている。

X70 は新開発の 1630 万画素 CMOS センサーと従来モデルの画像処理エンジン EXR Processor II、さらに新開発の 18.5mm、F2.8 広角レンズを搭載し、独自色再現技術とあわせて、風景からスナップ撮影まで幅広くカバーするコンパクトデジタルカメラである。また XF100 は 35mm 換算で 152 ~ 609mm 相当の焦点距離をカバーする超望遠レンズで来場者に体験させていた。



写5. ずらり並んだデジタルカメラやレンズ(ソニー)



写6. 4K フォトコーナーで作品を上映

◎ソニーは豊富なラインナップの α レンズと各種デジタルカメラを出展していた。最新機種のデジタル一眼レフカメラ“ α 6300”は、新開発の APS-C サイズの有効約 2430 万画素 Exmor CMOS を搭載し、銅配線の採用と回路プロセスの進化により集光効率が向上し、さらなる高感度と低ノイズ化し、さらに高速画像処理エンジン“BIONZ X”と組み合わせ、高解像度と高 S/N を実現した。銅配線により読み出し速度が向上し、画素加算のない全画素読み出しによる 4K 動画記録とフル HD 120fps の撮影機能を実現した。さらに最高の一瞬を捉えるため世界最速の 0.05 秒の 4D フォーカスシステムと世界最多の 425 点像面位相差 AF センサーにより、画面全域を高密度にカバーし、複雑な速い動きの被写体でも高速に高精度に捉えることができる。

その他の展示物としては、近日発売予定のデジタル一眼カメラレンズ α シリーズの“G”マスター、デジタルスチルカメラの“DSC-RX1R II”、小型軽量の 4K ハンディカム“FDR-AX40”、さらに超小型で人体に装着して使うアクションカムコードを並べていた。またブース奥の 4K フォトコーナーには、同社の 4K テレビプラビアを何台も使い、上記機種を使って撮影した素晴らしい映像やスチール作品を見せていた。



写7. デジタル4KカメラLUMIX“G”シリーズ(パナソニック)

◎パナソニックは豊富なラインナップのデジタルカメラ LUMIX シリーズをブースいっぱいに展開し、来場者に体験させていた。その中で注目は“GH4”で、1605 万画素 MOS センサーを搭載し従来機種に比べ約 2 倍の速度により、連写速度の高速化に加え、動画で動いている被写体を撮影した時のゆがみや歪を軽減できる。その上、高い解像度と広いダイナミックレンジで奥行き感のある描写力を発揮し、秒間 30 コマ連写から抽出した決定的瞬間の一コマの精緻な静止画像に加え、読み出し速度の高速化により 4K 動画撮影にも対応する。

新製品のハイエンドの“GX8”は 2030 万画素と一層の高解像度と画像処理エンジンの性能アップにより連写スピードは 30 コマと向上した。これまでの写真撮影では捉え切れなかった決定的瞬間を写真作品にすることもできる。さらにこの 30 コマ連射の 4K PHOTO はメモリーカード一杯になるまで継続でき、これまでと違う新しい撮影スタイルが構築できる。またこれらの機種とは別に、大判の 2000 万画素センサーと光学 16 倍ズーム LEICA レンズを搭載した“FZ 1000”も展示していた。

◎ニコンはキヤノンと同規模の広大なブースに大きな生花のようなオベジェを飾り、その周囲で主力製品のデジタル一眼レフカメラの“D5”や“D500”などを並べていた。エンドモデルの“D5”は、自社開発のフル 35mm サイズ、有効 2082 万画素 CMOS センサーを搭載し、新画像処理エンジン“EXPEED5”との連携で ISO 102400 の最高感度、高解像度と豊かな階調再現性を実現した。撮影したままの JPEG 画像でそのまま記録し、14fps の超高速連続撮影や 4K /30p 動画読み出しも可能である。



写 8. 巨大なオブジェの周囲では最新デジタルカメラを体験



写 9. 4K ギャラリーでは D5/D500 による 4K 映像の上映



写 10. PENTAX K-1 をメインに出展



写 11. プレミアアワード受賞の Art レンズ (SIGMA)



写 12. スマートグラスによるお映像システム (エプソン)



写 13. レーザー LCD プロジェクターによる 4K シアター

“D500” は前機種よりやや小板ながら有効 2088 万画素 CMOS を搭載し、画像処理エンジンは同じモデルを採用し、最大 200 コマまで約 10 コマ / 秒高速連続撮影が可能で、4K/30p 動画にも対応する。D5 と統一された操作性だが、かなり小型軽量で機動性も高い。奥の 4K ギャラリーでは D5/D500 で撮影した高精彩 4K 映像や静止画が上映されていた。またステージでは 342 インチサイズの 4K LED ディスプレイと 144 インチ大画面 LED を使い、著名なプロによる多彩なセミナーが開かれていた。

◎**リコーイメージング**はペンタックス初のフル 35mm サイズのデジタル一眼レフカメラ “PENTAX K-1” をメインに、最新モデルを展示していた。大判、高解像 (有効 3640 万画素) CMOS センサーを搭載し、独自の画像処理技術により、優れた階調再現性と高感度性能を実現した。従来のフィルム一眼レフと同等の被写界深度が得られ、ボケ味を効果的に利用した映像表現を可能にしている。5 軸手振れ補正と人工知能を応用した露出制御、イメージセンサーユニットを 1 画素ずつ微細にずらしながら 4 回撮影した画像を 1 枚に合成する超解像技術など最新テクノロジーを採用し、超高精細画像の撮影を可能にしている。その他、PENTAX の各種レンズやコンパクトデジ

タルカメラ、360° の全天球撮影が可能な “RICOH THETA”、双眼鏡などの体験展示をしていた。

◎**SIGMA** は GLOBAL VISION レンズシリーズ (Contemporary、Art、Sports) の最新の各種交換レンズを出展していたが、Art は交換レンズ部門のプレミアアワードを受賞した。

◎**エプソン**は他社とは違うユニークな出展をしていた。ウェアラブル機器のスマートグラス “モベリオ” は、眼鏡のような小型軽量 (88g) のヘッドセットをかけるだけで眼前に大画面映像が表示される。HDMI 対応で、HDD レコーダやブルーレイディスクなどのコンテンツ、TV 放送の上映、スマートフォンやタブレットの映像も大画面で楽しむことができる。シェードを変えると外光の透過率を変えることができ、ノーマルを選ぶと映像と周囲状況もあわせて見られるので様々な作業分野でも使え、ダークを選ぶと映像のみに集中でき、リビングでも車内や航空機内でもシアターとして、様々なコンテンツを楽しむことができる。体験してみたが、ノーマルシェードの場合、周囲状況と映像の両方を見るには慣れが必要な感じがした。

それとは別に自社開発の液晶型プロジェクター “EH-LS1000” を使ったホームシアターを開設していた。3 板 LCD 式で光

源にレーザーダイオードを使い DCI 色域を完全にカバーし、パネルの画素数は 1920 × 1080 × 3 枚だが、超解像技術とフレーム間補間をあわせ動きの速い 4K 映像も表示できる。レーザー光源はパルス駆動制御により映像信号に合わせたリアルタイム調光が可能で、真っ黒の再現もできる。

プロ向け動画エリア

最近のデジタル映像の流れを受け、静止画と動画の領域が重なっており、ここまで紹介した各社ブースでも、動画用の機器や映像が展示されていたが、今回 3 回目を迎えたプロ向け動画エリアには、今回 15 社がブースを構え、各種動画用機材を展示し、共有スペースでセミナーも開かれていた。

◎世界の映像業界にミニコンバータや小型記録器などを提供している **AJA ビデオシステムズ**は、4K 時代に応える 4K/U HD/2K/HD に対応する ProRes ファイルベースの最新ビデオレコーダ “Kipro Ultra” を展示していた。さらに一昨年デビューし IBC や InterBEE などでも評判になっている人間工学に基づき使いやすさを重視した小型軽量 4K カメラ “CION” を展示し、見学者に体験させていた。これらにより 4K のポストプロダクションが容易に行うことができるようになる。



写 14. 4K カメラ“CION” を初め様々な機器を展示 (AJA)



写 15. 最新の 4K デジタルシネマカメラ“DRAGON”シリーズを展示 (RAID)



写 16. Smart View 4K と URSA カメラ (BMD)

◎放送、映画機材のレンタルを主業務にする小輝日文グループの RAID は、RED Digital の 4K カメラを出展していた。DRAGON シリーズの中で、6K(6144 × 3160)19 メガピクセルの“Weapon”、5K(5120 × 2700)13.8 メガピクセルの“Scarlet-W”、そして RED 史上最小の 9.9 メガピクセル DRAGON を搭載した廉価モデル“RAVEN Brain”の 3 機種を展示していた。これらの 3 機種は同社が従来から提案する静止画と動画と同じカメラで撮影できる DSMC (Digital Still Motion Camera) を性能アップした DSMC2 に対応している最新モデルで注目を集めていた。

◎国内外で高い実績を上げているブラックマジックデザイン (BMD) は、多彩なカメラや周辺機器、サポートシステムを展示していた。カメラは豊富なラインナップの中から、スーパー 35mm サイズ、画



写 17. 4K ノンリニア編集系“EDIUS Pro8” (GV)

素数 4.6K のセンサーを搭載し軽量小型の“URSA Mini 4.6K”とデジカメスタイルで HD/UHD 対応の廉価モデルのカメラ“Micro Studio Camera 4K”を展示していた。さらにスーパー 16mm サイズのフル HD センサー、Raw/ProRes レコーダを搭載する超廉価、小型軽量の“Micro Cinema Camera”をドローンに装填していた。

周辺機器として、カメラへの接続が簡単で、キヤノンが提唱する DSLR (Digital Single Lens Reflex camera) と親和性の高い 5 インチサイズ高解像度 (1920 × 1080) モニターによりフォーカスとフレーミングをサポートし、SD レコーダ装備の“Video Assist”を展示していた。さらに現場でのカラーコレクションやポストプロダクションで有効な“DaVinci Resolve”も展示していた。

◎放送業界の大ブランドのグラスバレー (GV) は、カメラ本体はなかったが、4K/2K/HD 対応のカメラで撮影された様々なファイルを、レンダリングなしでネイティブ編集することが可能な最新ノンリニア編集システム“EDIUS Pro 8”を展示していた。最新 CPU に最適化したことで、他の編集ソフトに比べて高速な編集環境を提供し、ビデオや写真など PC 上に保存された様々なコンテンツを統合管理する“GV Browser”が搭載されている。エディターは中間コーデックへの変換に煩わされることなく、編集作業に集中することができる。

特別企画展示「国立天文台」

今回、スペシャルイベントとして、国立天文台の「次世代超大型天体望遠鏡」エリ



写 18. TMT 次世代天体望遠鏡の模型



写 19. 超高精密な主鏡の一枚の試作品

アが開設され見学者の注目を集めていた。1999 年、ハワイ島マウナケア山頂に建造された国立天文台のスバル望遠鏡 (口径 8.2m) は、宇宙最遠の銀河を捉えるなど宇宙科学の進歩に貢献してきた。

今回、日、米、加、中国、インド 5 国による国際プロジェクトが、従来にない超高性能の口径 30m の巨大望遠鏡“TMT(Thirty Meter Telescope)”の建設計画が進んでいる。同望遠鏡は 2014 年に建設を開始し 22 年からの観測開始を目標にしている。492 枚の鏡を張り合わせた直径 30m の主鏡で赤外線光を捉え、スバルやパロマ、さらにハッブル宇宙望遠鏡を上回る解像度が得られると期待されている。反射鏡は画像のぼやけを避けるため、体積の 1 億分の 1 しか膨張しないゼロ膨張ガラスを使っている。光学系の設計製作はキヤノンが、望遠鏡システムの本体構造と制御系を三菱電機が担当している。会場には、同天文台の模型と主鏡の一枚の鏡の試作品、さらにスバルで撮影した宇宙の写真が展示されていたが、大いに興がそされた。日本の超高度の超精密光学系の成果が活かされることを期待したい。



写 20. 様々な各種セミナーなどと共に写真作品の公開も行われていた



写 21. 無銘湿板カメラと歴史的写真も公開

セミナー・イベント

最新の機器展示と共に多種多様なセミナーや各種イベントも開催されていた。主催のCIPAの笹会長は昨今のデジタル・超高精細時代の流れを汲み「4K/8Kが変えるカメラ・映像市場」を掲げキーノートスピーチを行った。またゲストスピーカーの写真評論家飯野氏は毎年日本で発刊される「写真集は文化だ」という標題の講演を行った。またカメラメーカー各社の技術者らによる「次のカメラは？」という標題のパネルディスカッションや、世界的に著名なフォトグラファーのアレック・ソスのスペシャルトークショーも開かれていた。また各企業ブースではビジネスユーザーだけでなく、カメラ・写真愛好家向けのセミナーや講演やマーケット関係者向け各種セミナーも行われていた。

日仏写真文化交流の特別企画として、日本の代表的カメラ・写真専門誌の編集者によるアワード“ZOOMS Japan”とフランスの“Salon de la PHOTO”によるアワード“LesZOOMS”の受賞作品の合同展示と日仏受賞作家と編集者によるギャラリートークも行われていた。

アネックスホールでは、今回初めての試みとして、全国の中古カメラショップが一堂に集結した「中古カメラフェア」が開設されていたが、クラシックカメラからデジ

タルカメラまで、中古のカメラやレンズの掘り出し物が見つけれられるということで人気を集めていた。

日本カメラ博物館

今年も日本カメラ博物館（千代田区、半蔵門）コーナーが開設され、同館所蔵品の中からカメラの元祖とも言える「ダゲレオカメラ（銀板）」を筆頭に、湿板カメラ、乾板カメラなど黎明期のカメラが展示され、その後、日本で大きく成長発展した時代時代の名機が展示されていた。デジタル時代の現在、写真カメラはフィルムから電子光学機器へと大きく成長、変貌を遂げているが、光学像を撮影し銀塩や色素像として記録保存した黎明期・草創期の写真技術を目にし、大いに感銘を受け、しばし癒されるような感懐にふけることができた。

写真とデジタル化の象徴的事例

ここまで、CPプラスでみた最近のカメラや写真の状況と動向を見てきたが、カメラの外観は従来のフィルムカメラに似ているが、中身は全てデジタル化されている。光学像はMOSイメージセンサーで電気信号に変換され、デジタルデータとしてメモリーカードに記録保存される。画像を見るにはプリンターで紙に印刷して見ることもあるが、最近では高精細度の4Kモニターで拡大上映して見るが増えている。

このような状況下、写真の歴史そのものと言っても良く、さらにフィルムの成長とその後の衰退を経験した写真界の巨星コダックについて触れておきたい。コダックは1880年、ジョージ・イーストマンにより写真乾板製造会社として創設され、その後、世界で初めてロールフィルム、カラーフィルムを実用化し発売し、以来、写真関連製品に加え、映画用フィルムにおいても世界で最も高いシェアを占め、長年、「フィルムの巨人」として業界に君臨してきた。同社は1990年代に始まった映像のデジタル化の兆候をいち早く察知し、世界で初めてデジタルカメラを開発したメーカーでもある。しかし、高収益のフィルム事業にこだわり、



写 22. 全盛期の頃の広大なコダック本社全景



写 23. コダック研究所を尋ねた若かりし筆者

急速に成長、発展したデジタルカメラへの対応に遅れることになってしまった。あれほど高収益の巨大企業だったのに、2000年代後半から赤字経営体質になり、2012年にはついに「巨星落つ」かのごとく破産することになったのである。そして2013年、規模を大幅に縮小し、デジタルイメージング企業として新発足した。

コダック社はカナダと国境を接する五大湖のひとつのオンタリオ湖に接するロチェスターに本拠を構え、80年代全盛期の頃の本社工場は、広大な敷地に多くの施設があり、コダックパークと呼ばれていた。同地にはゼロックスも拠を構えていたが、ピーク時には、20万人に及ぶ人口のうち同社関係雇用者は6万人を越えるほどだった。しかし、経営破綻する直前の2011年には7000人にまで激減し、最後は2000人位になっていた。全盛時代、同社には博士号を持つ社員が7000人を超えていたそうだが、その後、コダックで育った多くの人材の中から、長年培った技術力をベースに多くのベンチャー企業が育っていく。写真フィルム技術は高度な化学技術、水質管理技術、画像技術の集まりで、それらを応用し「下水処理のエネルギー活用技術」、「製品デザイン」、「インプラント材料開発」、「医療画像の技術開発」、「心臓バイオマーカー関連技術」、「セラミック部品の製造」等々、画像処理、IT関連、医療・医薬品、水処理

などのエコ分野など多種多様な企業が育ちつつある。

ところで、筆者は以前、NHK 技研でハイビジョンとフィルム相互変換の研究に関わっていた関係で、1982年にニューヨークで開かれた SMPTE での帰途、同じニューヨーク州のロチェスターにあるコダック社を訪問したことがある。この頃のコダックは全盛期に近く、フィルム、写真業界で飛ぶ鳥落とすような勢いだったが、一介の若き研究者を暖かく迎え入れてくれ、超有名部長が空港にまで迎えに出てくれ、夕食までご馳走になった。あくる日は朝ホテルに車で迎えに来て、コダックの広大な工場を案内してくれ、研究所にてミーティングに臨んだ。

当時、同社の中央研究所はデジタル化に乗り出し始めた頃で、草創期だったハイビジョン（まだ高品位テレビと称していた）に強い関心を持っていた。筆者はつたない英語で NHK におけるハイビジョンの開発状況を説明した後で、同社の研究員からフィルム全盛期にもかかわらず将来を見越し取り組んでいたデジタル技術による高精細度映像処理に関する研究成果を見せてもらった。当時、研究所では次世代のことも考えデジタル関連技術の研究に精力的に取り組む、ある面では世界的レベルにも達していたのだが、会社全体ではフィルム分野で巨額な収益を上げていただけにデジタル化に出遅れてしまい、結果的には、その後、経営破綻を招くことになったのではなからうかと思っている。

それから 20 年近く経ち、コダックの経営危機が言われ始めていた 2000 年頃、筆者は NAB に行った時、立ち寄ったロサンゼルスでコダックの盛衰を象徴するような場所に出かけた。ハリウッドの観光名所になっている映画館チャイニーズシアターから歩いてすぐのコダック・シアターである。同シアターはアカデミー賞の授賞式会場で、正面の赤絨毯の階段を著名な俳優や監督が歩くさまはテレビ中継でも見慣れた情景である。この階段を実際に歩き、屋上からあの有名な山の中腹に建てられた映画のシンボル” HOLLY WOOD” サインの看



写 24. 90年代初頭、ハリウッド、チャイニーズシアター



写 25. アカデミー賞会場コダック・シアター

板を遠くに眺め、しばし感懐にふけたものだった。

それからさらに 10 年ほど経った 2012 年 2 月、コダック本社の倒産にあわせ、このシアターはコダックの名が消え、ドルビー・シアターに変わった。音響業界の雄だったドルビーは見事にデジタル化の波に乗り、その後、映像分野へも参入しますます隆盛となっている。一方、デジタル化に乗り損ねたコダックはハリウッドの表舞台から消える道を辿ったのである。

ところでわが国では、1934 年、当時の国策に沿って写真フィルムの国産のため設立された富士写真フィルムは、戦後の天然色写真、東京オリンピック（1964）以降のビデオ化、さらにその後の映像メディアの成長、変革の波を見事に捉え、デジタル化の波にうまく乗ることができた。最近では医療・医薬品や化粧品分野までも、今や映像業界をはるかに超える総合企業としてますます成長発展している。

なお、コダック社は 2012 年 1 月、ニューヨークの裁判所に連邦破産法の適用を申請し、翌年 8 月、規模を大幅に縮小した



写 26. アカデミー賞のシンボル 赤絨毯階段



写 27. 遠方に望むハリウッドのシンボル

デジタルイメージング企業として再出発を図っている。日本支社だったコダックジャパンは 2013 年 12 月、コダック合同会社と名を改め再出発し、現在、グラフィックコミュニケーション、エンタテインメントイメージングなどの分野の事業を着実に推進していると聞いている。

写真、フィルム、そしてデジタル化と言った時代の流れ、技術に対する先見性を活かすかどうか、運命の分かれ道を象徴するような事例のひとつとして、筆者の私見を交えつつ紹介した。

むすびにかえて

半世紀を越える歴史と実績を持つ CP プラスを通して、カメラや写真の状況と今後の展開を紹介した。デジタル化に向けた流れ、動画とスチールの境界の融合、ますます超高精細度化、低ノイズ化する画質、高機能化するカメラ技術などの動向を目にすることができた。しかも、このような流れは留まることはなく更なる成長発展を遂げて行くことを期待したい。

Ph.D. Takehisa Ishida
映像技術ジャーナリスト